

# 特集 自己教育の源流——江渡狄嶺の教育思想



四人の子の就学を拒否した

## 江渡狄嶺の家庭教育

はしがき

今の若い人たちは思いもよらないことであるが、わが子が学齢期になっても、就学を拒否した人がある。大正時代のことである。

義務教育令は明治五年から実施せられていたが、家庭教育の案を立て、教育に当たる者の学歴等を添えて出願すれば、審査の上で許可になったのである。私の聞いている限りでは詩人水野葉舟、社会評論家山川均等もこの

実行者であった。いま芸能界に活躍している中村メイ子も、たしか自宅で父君から教育を受けたと聞いている。今ここに紹介しようとしている江渡狄嶺も、就学拒否、自宅教育の勇敢な実践者の一人である。

大西 伍一

## 江渡狄嶺とは

一口に言えば人生の求道者ともいえるが、なかなか多面的な人物であった。たぶん彼自身も簡単にレッテルを貼られたり、ある範ちゅうにはめられたりするのを嫌う方であると思う。生まれは明治十三年（一八八〇）、青森県五戸町の呉服商の出である。仙台二高から東京帝国大学法律学科に入学、のち政治学科に転科した。この頃、秋田県花輪町出身の才媛、関村ミキ（女子高等師範学校専攻科学生）と恋愛。学生結婚を断行。ミキが学校を卒業して帰郷するにおよび、狄嶺は大学を中退してミキの後を追って花輪町へ行った。

二高時代から読書家で、また論客でもあった狄嶺の胸に、大きな影を落していたのは、クロポトキンであり、トルストイであった。

日本にはトルストイの紹介者があり、尊敬者はある。しかし、彼の思想の実行者はいない。われこそは日本における最初のトルストイ思想の実行者になりたいと発願した。

明治三十九年、徳富芦花は聖地巡礼の旅に上り、トルストイを訪問して帰国。東京西郊

の千歳村粕谷に隠棲した。狄嶺は芦花に決意を打ちあけて、土地の世話を頼んだ。

やがて同村船橋の地にわずかの土地と小さな住宅が見つかって、花輪からここへ引越して来た。明治四十四年三月のことである。

しかし家主の都合により、大正二年には豊多摩郡高井戸村（現、杉並区高井戸東一丁目）に移転した。

そこでは妻ミキと協力者小平英男の三人が一丸となって、多角経営で先駆的な都市近郊農業を開拓し、自宅を百性愛道場（のち牛欄寮）と称し、有縁の土を招き、協働・啓発の場とした。昭和十九年十二月病没。時に年六十四。

著書には『ある百姓の家』（大正十一年）、『土と心とを耕しつ』（大正十三年）、『地涌のすがた』（昭和十四年）があり、講義集として『場の研究』（昭和三十三年）が出版されている。著名人とはいえないかも知れぬが、今も熱心な崇拜者が各地に残っている。

## 就学拒否

ここでいよいよ狄嶺の子と、その教育につ

いて語らねばならない。

長女不二（明治四〇年生）現在は未亡人、狄嶺旧居の後を守っている。

長男十蔵（明治四三年生）六才で病死。

二男 復（大正二年生） 温室園芸家。

二女従子（大正五年生） 園芸家、神田秀穂氏の妻。

三男定之進（大正七年生）シベリヤで戦病死。

右五人のうち十蔵は夭折したのであるが、後の四人はみな就学を断り、自宅教育を受けた。なぜか？

人一倍子凡悩の狄嶺が、なぜ敢て就学拒否を断行したのか。狄嶺の書いたものから、その理由を探してみよう。

明治三十年代の東京帝国大学といえば、名実共に日本の最高学府だ。どんな理由からにもせよ、その学生々活を廃業した狄嶺は、当時の教育について決して好感を持っていなかったことだけは明かである。

彼は「妻と子に与うる手紙」の中で言う。

「今の教育には、その依って立つ根本の良心に、父とドーしても相容れないものがある。

かかる良心の伴はない、伴っても間違っている知識は、ホントーにお前達の生命も、人

類の幸福も、絶対に、育ても、長じもしない」  
 (「ある百姓の家」)

言うところは些か抽象的であるが、その前に「何故人間は今日まで、こんなな争ひ、分れていることだろうか」とか、「一体戦争は止められないでせうか」とか、これに類する記述があるから、狄嶺が反撥を感じたのは、たぶん日露戦争以後の軍国主義的傾向を中心とする諸般の社会状況と、これに同調する教育界の実情とであったかと思う。(当時は思想統制が激しくて、今日のように自由な発言のできない時代であった。)

狄嶺はまた言う。  
 「実際、父は人生の半を過ぎた三十・四十にして、始めてホントーに正しい認識、知恵に立ち得たのだ。……これも皆、今の世の中の生活・知識・教育の悪い結果のためだ。それを知って、父はドーしてお前達に再びこの若い生命の浪費をさせるようなことが出来やう。それは考えるだけでも恐ろしいことだ。」  
 と。また、

「父は、そのために、実にお前達の教育を、ドーしても人手に委すことは出来ないのだ。」  
 と。そして子供の就学を拒否しながらも、「お前達位いな子供の、嬉々として学校の校

庭に遊び、孜孜としてその教室に学んでいるのを見、顧みてお前達がボロ／＼の衣服を着いそがしい父や母の労働の合間／＼に、教育されることを考えて見れば、人一倍涙もろい父は……」

と、悲痛な思いを述べている。そして、この父が一身の榮譽も安樂もすてて、たゞ良心のためにこんな生活を送っていることを了として、父の方針に従ってやってほしい。自分の家では働ける者はみなその分に応じて働き、自分たちの労働によって食物を生産し、決して他人の作物や労働に頼ってはいない。これが人類の正しい生き方だと、くり返し断言している。

### 家庭教育計画

では、実際にどんな教育が家庭で行なわれたのであろうか。大正七年の「家庭日記」と題する一冊のノートがある。狄嶺・ミキ・小平英男および不二(十一歳)の四人が、思い思いのことを記入している。この中から教育関係の記入を拾い出してみる。

八月二十一日 水 とうさん

三大綱領

- 一、求むる勿れ。
- 一、拒む勿れ。

一、子供等の日曜厳守。

八月二十九日 木 クモリ とうさん

家庭の中心——かーさん(愛と宗教)

生活の中心——にいさん(労働と第一義)

日曜以外の不二ちゃんの勉強厳守。

九月一日 日 クモリのち晴 不二子

日曜学校出席人名、いねちゃん、てるちゃん、銀さん、かねちゃん、太郎ちゃん、次郎

ちゃん、おきんちゃん、兼ちゃん、林ちゃん

讚美 四二九、四二三、四二七、三九二、

夜二四、三三、二一五

九月二日 月 クモリ とうさん

二十前迄に大学教育を終了せしむる教育方針。

針。

母のかり

幼稚科——六歳迄

語学 ABC・イロハ(耳と口)

数学 一より

書き方 文字と画(目と手)

五感 音と色——木琴(サイロフォン)

クレヨン遊び

初等科——九歳又十歳迄

小学全科

ABC綴り方——タイプライター

博物——自然、園芸

見学(歴史地理の準備)——報告

父のかり

中等科——十二歳又十三歳迄

中学又女学校全科

和漢文

理化学、実験

歴史地理、見学

家庭作業

高等科——十四歳又十五歳迄

高等普通科

第二外国語(英語)

高等数学(三角、微積分、解析幾何)

夜学

専門科——十四歳又十五歳以上、半独学

専門学、大学程度——十八歳又十九歳迄

労働、実地——二十四歳迄、以後独立

× × ×

### 九月時間割

起床 五時、雨天及び日曜六時。不二六時  
 家拜 七時十分より三十分迄  
 日曜学校 九時乃至十時  
 勉強 九時より十二時  
 昼飯 十二時半、一時間休み  
 夕仕舞(九月、四月) 六時半前後  
 就寝 九時乃至十時

### 九月 不二子時間割

日	土	金	木	水	火	月	
9時 ↓ 10時							
習 オルガ ン							
自由 習字							
(日曜 学校)							
12時半昼飯休み1時半迄							
遊 戯				讚 美			
夜学なし				但手芸日誌			

昼休み中、オルガン、写生、採集等  
 労働修身並に労働史話(一週二回)——金  
 曜の花園仕事の外、他適宜の日、午後

一回) 見学 隔月一回  
 行く行くは「姉妹農園女学部」というも  
 のを起してみたいと思う。  
 九月十九日 木 晴 みき  
 昨夜風雨あり、昼には雨止みたれど風あり。  
 昨日春三様送って下された林檎一箱到達。  
 不二ちゃん、昨夜より「大学」を読み始む。  
 とーさんと不二ちゃん、午後より苺と菊の手  
 入れ(労働修身)

九月二十二日 日 雨 とーさん  
 雨にて家中のみで日曜学校をする。  
 讚美 復ちゃん 四一八。従子ちゃん  
 七八、一七六一三〇八、二篇、一九、  
 聖書 エペソ五章、ブラザー・ローレン  
 書翰其四。  
 日曜の夜の司会は、とーさん、かーさん、  
 にいさん、順番にすることに。讚美撰択  
 と夜の読みものを読む当番也。

九月三十日 日 クモリ風 とーさん  
 英男、朝食前荻窪へ行。後、三井・原田氏  
 へ行く。

(福音道徳と労働良心とを家庭主義の二脚とす。)

西診に日く。重んずべきは整頓したる家屋にあらずして、幸福健全なる家族なりと。労働の精神を子に与うれば、多くの財産を与ふるよりも子の幸福を増す。(ホエトリ)一年の計は穀を樹うるに如くはなし、十年の計は木を樹うるに如くはなし。終身の計は人を樹うるに如くはなし。(管子)

十月 時間表

起床 五時半、雨天乃日曜六時半、不二子六時半  
 家拝 七時半より七時五十分迄  
 日曜学校 九時半乃至十時  
 勉強 九時半より十二時迄  
 昼飯 十二時半より一時三十分迄  
 (休みなし)  
 夕仕舞並に手伝(十・三) 三時より六時  
 養鶏、家事、夕仕舞並に手伝。  
 雨天、日曜は三十分早く。

十月 不二子時間割

(今月より夜学一時間)

いた大正十一年頃の生活を次のように書いてある。  
 「現在私共のファミリ―は九人、働き手は六人ある。それで六反少しの田畑と、フレーム三十とを経営している。  
 外に人間ならざる家族として、百羽以上の白レグ君と名古屋君、南洋アヒル君が六羽、兎公が三羽、朝鮮牛のプラオ君と其子の無名氏。それに番犬阿弥公、猫の三毛君が各一匹いる。」

これが当時の生活の場であり、仲間であった。ここを彼は「M・H・S」と名づけた。「MはMonasteryである。学仏の道場である。同じ学仏とついてもChurchには生活はない。Hは人類多数の生活単位としてのHomeである。SはSyndicateである。組合であるが、私は労働の意味に用いた。」

「もし真面目にM・H・Sをその生活に現わそうとするならば、私共は時に十字架を負うて行くの覚悟がなければならない」と、悲壯にして厳肅な決意を述べている。  
 また、このM・H・Sを子供を中心として考えた場合に、H・C・Sとなることも言う。HはHome(家)、CはChurch(教会)、SはSchool(学校)である。

日	土	金	木	水	火	月	9:00 ↓ 10:00	10:00 ↓ 11:05	11:05 ↓ 12:00	12:05 ↓ 1:50	1:50 ↓ 3:00
9:00 ↓ 10:00 日曜学校	習 オルガン 字	練習科 理科学校	数 学	数 学	数 学	数 学	自由習科	仏語と読本	仏語と読本	労働修身	労働修身
	手芸洗濯日曜仕度	全午後員グライウシ餅箱養鶏手伝	労働修身	オルガン	労働修身	オルガン		昼	昼	昼	手芸・裁縫

(保母幼稚科手伝は全週午後を通ず。)

特別集会

- 第一土曜夜 家庭文芸会(文章詩歌輪読)
- (詩育)
- 第一日曜午後 家庭音楽会(楽育)
- 第二土曜夜 娯楽
- 第二日曜午後 家庭書画会(画育)
- 第三土曜夜 家庭文芸会(詩育)
- 讚美歌講義
- 第三日曜午後 書画音楽会
- 第四土曜夜 娯楽
- 第四日曜午後 見学・遠足・採集・運動

ここまで書いてきて、私は前言を取消したくなった。狄嶺の就学拒否は、単に軍国主義教育反対というような単純なものではなく、もつともつと深い哲学的、宗教的な思索から生まれたものである。

狄嶺のこうした教育思想が、どのようにして形成されたか。これは興味あることであるが、もはや予定の紙数も尽きた。

しかし、狄嶺の残した資料を漁ってみると、ルソー、ペスタロッチ、トルストイ、デュイ等の説に瞞目している。また明治二十年代の前半に英国で始められた新教育学校(アポット・ショルム校およびペテルス校)のことも知っていたかと思う。

要するに、自然教育、体験教育、生活教育或は総合教育等の思想の一系列として見るべきではあるまいか。

日本の初等教育史を論ずる場合に、学校教育史以外に、このように清冽な細流があったことを見逃してはならぬ。  
 また、思想を持っていない現代の家庭生活や家庭教育を想うとき、些かの妥協をも許さない狄嶺の発言と行動とに自ら頭が下がるの覚えるのである。

日	土	金	木	水	火	月	7:05 ↓ 8:10	8:10 ↓ 8:30	8:10 ↓ 8:30	八時より八時半迄
讚 美	娯 楽	漢 文	歴 史	仏語習字	地 理	仏語習字				山上の垂訓
										讚美(かーさん)
										山上の垂訓
										讚美(かーさん)
										細字書き(讚美歌)

手芸、日記は例月の通り

ずいぶん綿密な、よく行き届いた計画や予定で、狄嶺がいかに教育に熱心であったかということがよくわかる。しかし、これがどの程度実行できたか。長女不二さんの思い山(別稿)によれば、多数の来客や緊急の農作業のために、いつも狂い勝ちであったということである。狄嶺もこれを「最大の遺憾である」と述べている。

[M・H・S]と[H・C・S]

狄嶺がその第一著作『ある百姓の家』を書

注

- I 狄嶺は号で、本名は幸三郎。
- II 引用した狄嶺の言葉はすべて『ある百姓の家』からで、用字も原本のまま。
- III 江渡家では狄嶺・ミキ並に小平英男の死去により、現在は農業を営んでいない。但、次男復氏は八王子市で温室園芸を自営。
- IV 狄嶺の教育思想からいえば「単校教育」無形塾についても述べねばならぬが、ここでは家庭教育だけにとどめた。
- V 狄嶺の資料保存と研究のため、有志が狄嶺会を組織し、「江渡狄嶺研究」を発行中。事務所は杉並区高井戸東一―八―十二 江渡方 狄嶺会
- (筆者大西伍一氏は「狄嶺会常任世話人で、『土の教育』(平凡社)の著作もある。)

文 献

- 江渡狄嶺「或る百姓の家」大正十一年 総文館
- 江渡狄嶺「土と心とを耕しつゝ」大正十三年 義文閣
- 江渡狄嶺「地涌のすがた」昭和十四年青年書房
- 江渡狄嶺「場の研究」昭和十三年 平凡社
- 大島康正「江渡狄嶺―百姓の実践哲学」(朝日新聞社発行「日本の思想家3」昭和三八年)

# 私の受けた家庭教育



江渡 不二

親からどんな教育を受けたかと聞かれましても、何とお答えしてよいやら、私はとまどっています。もう六〇才を過ぎた私には、何もかも遠い霧の中のような気がいたします。皆さんが特に私にこんなことをお聞きになりたいのは、たぶん学齢期になっても、小学校へも行かせないで、家庭教育だけで押し通されたという点にあるのかと思います。

## 1

私の一家の事情を述べると長くなりますから、簡単に申します。私は七才までは母の里（秋田県花輪町）に預けられ、祖母と共に暮らしていました。が、七才（大正二年）のとき、両親が百姓生活に踏み切って間もない東京郊外の高井戸へ参りました。杉や雑木に囲まれたわら家でした。

私の下には十歳（三才）と復（一才）とい

う二人の弟があり、三年後には従子が生まれ、それから二年後には定之進が生まれました。これより先、十歳は六才（大正四年）で早死しましたので、私の下には三人の弟妹がいました。しかし、私は学齢期になっても小学校へは入れてもらえないで、自宅教育を受けたのです。お友達がかバンをさげて学校へ行くのを見ても、別にうらやましいとも思いませんでした。しかし、とほしい中からもオルガンを買ってもらったし、オルガンの先生のお宅へ通った思い出があります。両親は音楽に特に深い関心があったようです。毎朝三十分間は私のオルガン練習が日課になっていました。大きくなったら音楽家になりたいというような夢を抱いていたこともあり、お笑らい下さいと言いたいところでした。両親とも相当の教育を受けていましたし、教育の理想に燃えていたので、私たちが子供に

は大きな期待をかけていたことと思います。それで、家庭教育についての時間割を定めて午前中は両親が交代で先生となって、いろいろの学科を教えようと思いました。私もそれが楽しみでした。しかし、農作業というものは、季節にねばなりませんし、その日のお天気にも順応して臨機の処置を必要とすることが生じます。またほとんど毎日のように、三人五人と来られる訪問者にも悩まされました。新聞・雑誌で百性愛道場のことや伝えられたので、急に知れ渡ったのでしょうか。時間かまわずに来て腰を落ちつけて話しこむ客のために、私共の教育時間割は、いつも乱されがちでした。父は客の相手をするし、私はお茶をわかしたり、時には食事を出す仕度をしました。客のない日も、十一時半になれば家族の昼食の仕度のため、台所へゆきました。

## 2

この外、私の主な仕事は三人の弟妹の子守りでした。家の周囲や、畑の畦で弟妹と近所のお友だちを遊ばせるのが日課のようでした。風呂をたくのも私の役目でしたが、燃料が不自由ですから、畑の畦や川の土手から木の

枝や板切れを拾い集めておいて、十日貯めてか二十日に一度くらいしか風呂をわかしました。風呂のない日はいろりの傍に置いてある銅壺の湯を汲み出して、三人の子の顔や手足を拭いてやるのが私の仕事でした。この子たちの夕食を作って、食べさせるのも私の仕事の一つ。自分の家で鶏を飼い、卵

を売っていながら、三人の子に卵一個、そんな貧しい夕食でも、卵の匂いがすればみんな喜んで食べてくれました。夕食後、暗くなってから、大人たちといっしょに神田川の川土手へ行って、星空を仰ぎながら行水をしたのも、今にしてみれば爽やかな思い出となりました。

## 不二さんのこと

江渡不二さん（64才）は、江渡狄嶺の長女として、明治四〇年に生まれた。小さい頃から狄嶺と妻、関村ミキの寵愛を受けスクスクと育った。はじめて高井戸の家を訪ねた時、不二さんは「とても文章を書くの



はダメです。働らくのは楽しくてしようがないですけれどねえ」と言って笑われた。本当に働らくのが楽しくて仕方ないという感じである。「いつもお客さんには家でとれたものを出すことにしていますから」といって昼食を用意してくれたが、まだ狄嶺当時の部屋の中で、ひどくおいしかった漬けものの味を思い出す。この周囲も、今では家が建ち並び、広々とした畑や木立があった当時の面影はなくなってしまったという。けれども、狄嶺がまいた一粒の種は、不二さんのやわらかな笑顔の中に、脈々として生き残っていると言え。不二さんの家に残されている狄嶺の蔵書は、実に貴重なもので、当時の社会状況をうかがいしる事が出来る。（三吉）

## 3

農作業や来客に禍いされながらも、出来るだけ時間割通りに学習の面倒をもらっていた頃はまだよかったです。弟の復が難病にとりつかれてからは、すっかり崩れてしまいました。母は直接の看護に当たるので寸暇もなく、私は毎日繻帯洗いや洗濯物の係りとなってしまいました。復の発病は九才頃からでしたが、病室にこもっていた四年間は、父がしきりにいろいろの本を買ってきて与えていました。ですから復は病気のおかげで、兄弟中では一ばんよく読書ができたのではないかと思います。

## 4

父は本が好きでしたから、自分の本といっしょに子供の本もよく買ってきてくれました。

たくさんのお客の中には、子供の本をくださる方もありました。私たちは来客の誰彼なしに、なんでもわからないことを質問しては教わりました。お客さんは、みな先生でした。また、家庭で雑誌を作ったこともあり、私共姉妹が交代で編集した回覧雑誌です。近所のお友だちも誘って、作文や図画を持寄り父にも原稿をもらったし、時には水野葉舟さんや高村光太郎さんのような親しいお客様からも原稿をもらって、当番が表紙をつけて綴るのです。これは教育の一つの仕事として、父がやらせたものと思いますが、来客の中には、これはおもしろいといつて借りて行かれる人もありました。後になりましたが、雑誌の名前は「少年諸国」や「少年少女」でした。

日曜学校も楽しい思い出の一つです。近所のお友だちも呼んできて、庭先の木陰で、父や母がよく聖書の話をしたり、讃美歌を教えてくださいました。粕谷の下曾根牧師さんもよく来てくれました。この方は一風変わった方で病気で休んでいる弟の枕許で、落語をおもしろく語って聞かせるのが得意でした。私共はみんな「粕谷のおじいさん」と慕って、お話の後ではいつもおじいさんの好きな蕎麦を打って差し上げたものです。日曜学校が終わっ

てから、お菓子や西瓜をもらうのも、みんなの楽しみでした。

両親と外出した記憶は少ないのですが、よい映画が上映されているときに、父に連れられてもらったこともあり、

## 5

私は十四、五才のころから、銀座の高級園芸市場へ切花を持って行くようになりました。家を出るときに、交通費としていつも五〇銭玉を一つもらいます。京王電車を一区間歩いて電車賃を節約すると、三十八銭で行って来られます。残った十二銭の使い方をよく考えて、銀座のデパートのいろんな展覧会等を見て歩くのも楽しみの一つでした。これは両親の勧めによることですが、帰ってくる、その展覧会の模様等をこまごまよく聞かれたものです。その頃は、日比谷公園へもよく行ったので、園内のことはわが庭のように何でも知っていました。

切花の外に、神田の万惣（果物店）へ苺をどけに行くのも私の仕事でした。

畑作や養鶏は近所の農家に負けないようにやっていました。毎年今頃になると、昼間は大根ひき、夜は大根洗い。一晩に千本も洗う

と十時頃になり、手足は冷えるし、足も腰も立たなくなり、こんな作業は大人といっしょにやりました。

この頃には家計の方もよほど落ちて来たことと思います。弟や妹の教育もある程度は時間割通りやっていたようですし、よいと思つた本を買うくらいには、事欠かなかつたと思います。

## 6

「火燃し上手は世帯上手」とやら。母は火の燃やし方をやかましく言いました。煙らないようにということ、始終くり返して申しました。そして火を燃しながら、傍に火消壺を置いて、こまめに消炭を作っておいて、これはコンロに使うのです。木炭を買うのは年に一俵だけと定まっていました。

ある年、クリスマス前の夜に木炭を一俵買込んだので、私は嬉しくて早速その炭俵の口を開いて、炭取籠にいっぱい堅炭を入れまし「炭籠には八分目だけ入れるものだ。いっぱい入れると、皆がつい、その気になって余分に使ってしまう。お前は経済観念がない」と腹八分目と申しますが、炭籠も八分目という

ことは、家計の教訓として今も忘れません。

祖母はお裁縫が上手で、一家中の縫物——着物はもちろん蒲団まで——を一人で引受けていました。押麦の袋を開いて、紺に染めて仕事着に仕立てたりするのも得意でした。昔気質なので、蒲団を踏んだりすると、その不作法を口やかましくとがめられたものです。食事の作法もうるさく注意されました。

食事にお祈りをするのは、たぶん父が始めたことでしょう。今になってみると、キリスト教の祈りでありました。

父はよく、朝食後に論語や孝経の一節を読んで、簡単な解釈をして聞かせることがあります。ある時代は聖書でありました。晩年には道元さんの『典座教訓』等がそれに代わりました。父のいない時は、母が代わりに勤めました。後には朝は止めて、昼食後になり

ました。石鹼が湿っていると早く消耗してしまおうからといって、石鹼のまん中に穴をあけて、糸を通して吊しておくのも母のくせでした。お風呂場に電灯が引かれてからも、母はわざと電灯を消して入浴しました。暗くても差支えない、電気が勿体ないと思っていたようです。母と暮らした永い歳月を顧りみて、口やか

ましい方ではなかったと思います。父も同様です。「これを見習え」というようなことは申しませんでしたが、自分の家を道場と称していたくらいですから、内心では絶えず自分を引きしめ、わが子や同居の若い人々への模範をとという気持があつたかも知れません。

## 7

とりとめもなく思いを書きしてみました。親の信念で義務教育を受ける機会を与えられなかった珍らしい生い立ちを持つ私共姉弟です。しかし、今となってみれば、世間並の生活には事欠くような気もいたしません。一番淋しいと思うのは、お友だちが少ないというようなことでしょうか。

読み、書き、そろばんだけなら、小学校に行かないでも人並のことは覚えられると思います。その外に私共が家庭環境から受けた教育、或いはしつけには、私の家独特のものもありましょうし、或いは明治以来の一般家庭に広く行きわたっていたものもありましょう。時代が目まぐるしく変わって参りました。皆さんの新しい目で、ご批判をいただきました。うございます。

## 参宮橋より

▼やや肩を張って言えば、この小さな事務所をぼくらの「共同性追求の実践の場」にしたいと念じています。この運営に関しても、一人一人の自立性と共同性との陸と海のように互いにせり合いながら微妙な調和を創り出してゆくと、う風にやってゆきたいと思えます。今、仕事の分担と責任をどんな風にしてゆこうかと、折にふれて話し合っています。

雑誌制作、経理事務、キブツ研修生派遣などの事業、その他のさまざまな活動をどうやってゆくか、命令や強制によらぬ創造的な仕事秩序、人間関係を生み出してゆきたいものです。

▼昼食を再度共同化し、毎昼食に玄米とミソ汁を食べることにしました。自然農法の玄米でもあるといいのですが、安く入手できないので、一キロ百五十円也の古米の玄米ですが、けっこうウマイものです。一口五十回以上もかむので、昼食時が静かになりました。

▼財政難はいかかわらず。新しい会員を紹介したりしてくれませんか。

H